

熾盛 SIJOU

2025/11
151

真宗大谷派 専龍寺報

別れ路は涙かぎりなし 弥陀の浄土ありといえども

武田法真

I have lost you. I can't hold back my tears.
However I keep hearing "kueissyô"



専龍寺 報恩講

11月12日(水) 13:30

11月13日(木) 9:30 13:30

おとし 両日とも12:00】

講師 藤枝良太さん(鳥取県琴浦町 専證寺住職)

報恩講とは



親鸞聖人のご命日の法要を「御正忌報恩講(ごしょうきほうおんこう)」といいます。およそ今から860年前、1262(弘長2)年11月28日に、京都の地で、生涯を終えられました。

東本願寺では11月28日(旧暦)、西本願寺では、1月16日(明治以降新暦)をご命日としています。七日間の昼夜、法要がご本山ではおつとまりになります。

専龍寺では、「報恩講」のご法座として毎年11月12日、13日の両日につとめ、近隣の大谷派寺院の僧侶のみなさまと、年に一度の節で「正信偈」のおつとめをしています。また「御正忌」のご法座として、以前は1月26～28日の3日間勤めてまいり、現在は1月末か2月当初につとめています。

真宗門徒にとっては、御正忌報恩講は、何よりも要となる御仏事です。それは、お念仏を受け継いでこられた門徒の人びとが、自分の人生にとって、なくてはならない大切な人として、親鸞聖人を憶い続けてこられたからでしょう。

親鸞聖人のひ孫である覚如上人が、三十三回忌の際に作られた『報恩講式』という文がのこされています。そこでは当時のご門徒の様子が、こう伝えられています。

親鸞聖人のご恩を重く感じるご門徒、わが命より親鸞聖人のご遺徳をつなげていくことを大切にされた人びと、毎年、時間も距離もはるか遠くはなれていることを問題にせず、幾多の困難をのりこえながら、関東の奥より歩き、山々を越え幾多の日を送り、京へお参りになりました。いざ親鸞聖人の廟堂にひざまづくと、お骨を拝んで断腸のおもいで涙をぬぐいました。ご入

滅は、はるか昔ですが、お越しになる人は今なお絶えることはありません。ああなんということでしょうか。懐かしいあのお顔は、もう煙となってしまいましたが、今確かに在りし日のお姿が眼前にいらっしゃいます。なんとせつないことでしょう。在りし日のお声も、もう再びお聞きすることはできないけれど、耳底にとどまり響きつづきます。

三十三年過ぎても、お墓でひざをつき泣き崩れるご門徒の姿は、親鸞聖人にお会いした日々が、遺された人にとって、その後の人生を支え、歩み続けたことを教えています。

このご門徒のお姿と、その姿に手を合わせる覚如上人の姿こそ、私たちが本年も「御正忌報恩講」にお会いしなければならぬ意味を教えてくださっているのではないのでしょうか。

私たちは「煩惱熾盛の凡夫」と言われます。「煩惱」という、身も心も思うとおりにならず、まるで「炭火の熾き」がくすぶるように、どうにもならない存在です。

毎年ご命日に涙を流し続ける人生が、親鸞聖人のご門徒の姿でした。それは、お別れした後も、代えがたい出会いとお育てを受け、ともに歩み続けた日は終わることはなく、絶え間なく恩徳を感じ生きたご門徒の人生でした。

「御正忌報恩講」が本年もつとまります。出遇(であ)い、別れ、どうにもならないこの身とともに。悲喜交わり流れる涙とともに。尊き碍りなき世界へ、手をあわせ。これまでも。これから。

(住職 記)

お斎(とき)に込められたところ



「お斎」とは、現在では広く仏事の際にいただく食事のことを言いますが、本来は寺院で生活する僧侶の食事のことを示す言葉でした。「斎」という字には

「正しい」「慎み」という意味があり、慎み深く、行い正しい僧侶の食事のことを「お斎」と呼んだのです。そこから、仏事のあとにいただく食事のことも「お斎」と言うようになりました。

真宗大谷派の本山である真宗本廟（東本願寺）における「お斎」といえば、「報恩講」の際に振舞われるものが代表的です。

報恩講とは、親鸞聖人（1173～1262）の遺徳を偲び、その命日である11月28日に仏事を勤めたことに始まります。今も東本願寺では、毎年11月21日から28日までの七昼夜にわたって勤められる、もっとも重要な法要です。この日に合わせ、全国各地のご門徒が「れんこん」や「しいたけ」などを持ち寄り、一汁三菜のお斎を作ります。

その昔は、お斎で出された料理を、参

拝できなかつたご門徒のために各地方へ持ち帰り、皆でいただき、仏法に出遇えたことに感謝し喜びを分かちあったと言います。

このようにお斎とは、持ち寄った者の思いと、分け合っていたる者同士の思いが重なる、尊い食事なのです。

お斎は、殺生を戒める仏教の教えに従い、肉や魚を一切使わない精進料理です。しかし動物や魚だけでなく、野菜などの植物も「いのち」あるものであり、その「いのち」をいただいていることを私たちは忘れてはなりません。

食事というのは、私たちが「いのち」をいただき、「いのち」をつながせていただいているといういたみ・悲しみ、そして有難さを知る、大切な場なのです。だから私たちは食事をいただく前に「いただきます」と手を合わせ、「ごちそうさま」といたみをもって感謝するので

『お斎レシピ みんなでおいしい精進料理』（東本願寺出版）より

本山報恩講 ライブ配信 専龍寺本堂にて参拝

東本願寺での御正忌報恩講へ、専龍寺の本堂にて、参拝します。なかなか本山に参れませんが、同時配信の画面ですが、ともどもにお参りします。

11月25日(火)

14:00 逮夜おつとめ

御文法話

16:00 初夜勤行

16:30 御伝鈔(親鸞聖人のご生涯)

18:30 終了

11月28日(金)

9:00 結願日中集会(開式)

祖徳讃嘆

10:00 結願日中始

12:00 終了

両日とも、おときはありません。
茶菓のご用意はいたしておりますので
ごゆるりとお過ごしください。

今月の言葉より

弥陀の浄土ありといえども ～

今月の言葉は、何十年も1月末の寒い中、広島県の雪深い地よりお越しいただいた武田法真先生が詠まれた句です。

いつもお寺で聴聞されていたご門徒のお宅で色紙に飾られていいです。

その家のお内仏の報恩講へ毎年お参りさせていただきながら、お言葉に出会わせていただいています。

まことに不思議なもので、20代から今に至るまで言葉は変わらないのに、生きながらえて来た私にとっては、別れをくりかえす度に、この句の重みが年々ずっしりと重く深くなるように感じます。

先生は御正忌の3日間午前午後繰り返して、念仏とともに生きたご自身の人生とともに、阿弥陀さま、親鸞聖人のご恩徳をお伝えされていたことを思い起こします。

お父様を広島の前原で亡くされたこととともに、慈悲の教えをお話しいただいたように思います。

自身の悲しみを語ることは、悲しみが薄れたり、無くなったのではなく、話すたび、あの日に立ち戻り、悲しみを抱えつづけるのだと、そうご門徒に教えられました。

また専龍寺のあるご門徒も、戦争で早々に父を亡くされ、「父に抱かれたかった」とおっしゃっていたそうです。

極楽浄土を阿弥陀経では「俱会一处（ともにひとつところで会う）」と教えられています。

悲しみを抱き続け、私に寄り添ってくださった阿弥陀さまとともに人生を終えられていったのだと、今、思います。

(住職 記)

俱会一处 kueissyô

熾盛(しじょう)

熾盛とは、火が燃え盛る様子をいいます。

阿弥陀仏のすがたは光明熾盛とあらわされ、その願いは、罪惡深重・煩惱熾盛の衆生をたすけんがためと説かれています。

人は、つながりのなか、気づかぬままに、はてしなく罪惡を重ね続け、いまここに生きています。

その存在を悲しみ、慈しみ、寄りそい、ともにあろうとし続けるはたらきを、「阿弥陀」といいます。



専龍寺HP



東本願寺HP

発行日 2025年11月1日

発行者 専龍寺

〒699-3671

島根県益田市津田町561

Tel・fax 0856-27-0020

mail: iwamisenryuji★gmail.com

★は@マーク